

テクノロジーは医師、医療を変えるのか 一次世代の医療者に求められる3つの力



国立大学法人東京科学大学 医療・創薬イノベーション教育開発機構
特任教授 医師／医療未来学者

奥 真也 Sinya Oku

座長
小林 正学

AI が医師の知的領域に急速に近づく中、現代および次世代の医療者は何を武器に生き残るべきか。本講演では、医療未来学の立場からこの問いに答える。

第 1 に、「理由を構想する力」一症状の背景にある文脈や患者さんの人生を汲み取り、この患者さんがなぜ、そしてどのような医療を受けるべきなのかを構想する力。第 2 に、複数の AI ツールを使い分け組み合わせ、かつ自分の立ち位置を失わない「ブレインゲーマネージャーの立場を全うする」という視座。第 3 に、自由診療も含めた柔軟な医療の提供のかたちを、自ら構想し、形にする知的持続力。保険診療と自由診療を対立させるのではなく、制度医療の規制からの距離と柔軟性を持つ領域ならではの多様な診療を、AI・医師 AI をフル活用して自ら形にする医療者となることが求められる。これらの関係性を次世代の医療の本線として提示したい。

併せて、患者さん・患者さん側 AI・医師 AI・医師という 4 者が診察室に集う新しい診療の形態について詳しく述べる。患者さんの傍らに立つ患者さん側 AI は、症状や不安を言語化し、日常の変化を継続的に記録し、診察前に情報を整理する役割を担う。医師の傍らに立つ医師 AI は、膨大な知見や症例を参照し、鑑別診断や治療方針の候補を提示する役割を持つ。この 2 つの AI が情報を橋渡しすることで、多忙すぎる医師が強いられる 3 分診療と、患者さんが望む 3 時間診療を同時に成立させる。限られた診察時間の密度を高めて患者さん本位の医療を実施でき、医師と患者さんが本質的な対話に時間を割けるようになる。

ただし、AI と医師の線引きは、AI 技術の進歩そのものによって決まるのではない。どこまでを AI に委ね、どこからを医師が担うのかは、むしろ人間側—患者さん自身、医療者自身—が主体的に定めるべきものである。技術ができることと、技術側にさせてよいことは別次元のものであり、人間（人類）がその境界設定を放棄したとすれば、患者さんや医師、ひいては人類は主体性を大きく喪失してしまう。次世代の医療者に求められるのは、AI の能力を正しく理解した上で、どこに線を引くかを、社会全体で決めることに貢献し続けることである。

略歴

1962 年、大阪生まれ。東京大学医学部卒。英レスター大学経営大学院修了。東京大学医学部附属病院 22 世紀医療センター准教授、会津大学教授を経て、製薬会社、医療機器メーカー、薬事コンサルティング会社などに勤務。現在は、東京科学大学医療・創薬イノベーション教育開発機構特任教授。著書に『Die 革命』（大和書房）、『未来の医療年表』（講談社現代新書）、『AI に看取られる日』（朝日新聞出版）、『医療未来学者の父が医師になる娘へ語るこれからの医の世界』（講談社）など。

研究領域

・医療介護 DX/AI・Longevity・医療情報学

所属団体等

日本核医学会、日本医学放射線学会、日本医療情報学会、日本産業衛生学会

資格・肩書等

医師・医学博士・MBA